

循環型アーカイブの構築を目指して県立図書館と協働 震災関連資料の活用促進を研究



震災関連資料の 利用活性を目指して

東日本大震災の後、岩手県立図書館では被災県にある公立図書館として災害関連資料の収集を自主的に始め、震災のあった2011年の10月には「震災関連資料コーナー」として一般への公開を始めました。2012年3月には東北を中心とした各図書館が「震災記録を図書館に」キャンペーンを開始し、震災関連資料を収集・保存し、それらを公開してこの震災を後世に伝えようという取組が始まりました。

いち早く資料の収集に取り組んでいた岩手県立図書館ですが、その収集資料は各自自治体の発行物だけでなく、住民やNPOなどが発行する避難所だよりやボランティアニュース、ミニコミ誌やフリーペーパー、

する情報や関係する情報を加えていくことでした。つまりOPACで管理している資料に、関連するデータファイルを紐付けしていくことで資料に関する情報を増やし、検索しやすくなり他の資料と関連づけやすくなり、ミニコミ誌やフリーペーパー、

当初はまず先に自分の学習テーマを設定し、そこに必要な資料を岩手県立図書館の資料コーナーから集めてもらうという形で進めていきましたが、短時間のワークでは資料探しが難しく、後には資料コーナーから興味のある資料を見つけてもらい、そこからテーマを決めるという方法へと移行していきました。

例えば、2017年10月から全4回で実施した震災学習には、公募に応じた市民5名と本学学生4名が参加してくれたのですが、1回目は岩手県立図書館の資料をもとにそれぞれの学習テーマを決定、2回目は山田町でフィールドワークを実施、3回目はフィールドワークで記録した資料をもとにレポート等を作成、4回目には各々がまとめた学習成果を報告し合いました。この間、6件の新資料に64件の既存資料が関連づけられシステムに登録されました。

震災学習の参加者からは、「学習

interview



富澤 浩樹 講師

2013年より、岩手県立大学ソフトウェア情報学部講師。地域課題の解決を目指した情報システムへの応用研究に取り組む。専門は情報システム学、人文社会情報学。

イベントの告知チラシなど多岐にわたりました。これらの資料の管理には既存の図書検索システムOPAC(Online Public Access Catalog)が使用されていましたが、既存システムを利用しながらゆえにアーカイブの早期開設が可能になったというメリットがある一方、通常図書検索に使用されるタイトルや著者名などのキーワードからでは1枚ものの資料や逐次刊行物の検索が難しいという課題も抱えていました。

いわゆる情報システムは、コンピュータシステムだけで成り立つものではありません。使用する人の目的や行動などを考慮したシステムデザインが必要となります。その観点からであれば、資料の活用促進を図れるのではないかと考えました。そこで2014年より岩手県立図書館と協働して、これら震災関

の機会が得られてよかった」「フィールドワークで撮影した写真が新たにアーカイブされることで現地の様子を思い出すことができた」「事後学習に役立った」など肯定的な感想が



発災直後の図書館の様子



震災関連資料コーナーの様子

連資料の利用活性を通じた震災の記憶の風化防止を目的としたプロジェクトとして、震災学習と連携した震災関連資料デジタルアーカイブシステムへの試作に取り組むこととなりました。

震災学習を活用した アーカイブシステムを構築

このプロジェクトの第一の目的は、図書館が集めた膨大な資料に対し、それを利用したい人が的確にアクセスできることです。しかし既存の図書検索システムでは、キーワードから求める資料にたどり着きづらいという課題がありました。特にチラシなどの1枚ものの資料にはその傾向が顕著でした。

図書館にいくら多くの資料が所蔵されていても、それが人の目に触れなければその価値を発揮することは

できません。他の先生方が行ってきたこれまでの研究で、資料の利活用を促すためには、「利用の日常化」や「人の思い、記憶を巻き込んだ記録」が必要だと指摘されています。資料は何かの元となる素材であり、データであつて、洛陽の紙価を高める以前の未知なるものです。そこで活用しようと考えたのが「震災学習」です。岩手県立図書館の震災関連資料を活用した震災学習を実施し、その際に使用した資料のリストや、フィールドワークで撮影した写真、学習後にまとめたレポートなどを新資料として関連づけられるシステムを段階的に構築し、2015年から2018年にかけて行った震災学習やワークショップを通して新システムの試行を重ねてきました。具体的には、資料をテーマで括って横のつながりをつけること、そして、元となる資料にそれを説明

できませ



現地取材の様子(山田町)

に関心を持つようになったという声も聞かれ、大学としてこのようなプロジェクトに参加していることの意義を感じています。

システムの開発や改良はこれからも続きますが、このプロジェクトの最終的なゴールは「開かれた図書館」への貢献であると私は考えています。すなわち、人と人との出会いの場や、知的活動のための空間を創出、提供し、新しい知を生み出す活動を支援することです。継続的に実施される震災学習やワークショップのたびにデータが蓄積されアーカイブされていく、それらの資料がまた震災学習に役立てられる、新しい情報が追加されることで時系



現地取材の様子(宮古市)

寄せられました。これらの結果から、震災学習をきっかけに資料の活用が促されたこと、記憶の風化を防ぐための学習装置としてプロジェクトが機能したという結果が得られました。

このような試行を経て、2020年5月にはプロジェクトのポータルサイト「Iwate Reedy Project」が一般公開を果たしました。サイトでは岩手県立図書館が所有する震災関連資料の検索ができるほか、「マイリスト」と呼ばれる資料リストを作成する機能も持たせました。マイリストには

後から新たな資料を追加することもできますし、任意でサイト上に公開することも可能です。マイリストはリスト作成者本人の学習に役立つほか、そのテーマに関心のある人にとっても貴重な情報源となります。

また「新規作成資料の紹介」として震災学習を通して新たに作成した資料を参照した資料とともに公開しているほか、テーマごとにおすすめの資料をまとめた「パスファインダー(手引き)」も掲載しています。

ちなみにReedyとは「葦のような」「細長い」「もろい」といった意味を持つ形容詞です。一本では細くもろい葦でも編むことで耐久性のある履物やかごになるように、震災関連資料もあるまとまりで束ねれば大きな意味を持つであろうことを例えて名付けました。また細くとも息の長い活動になるようにとの願いも込めました。

列的な変化をたどれるなど、ポータルサイトを活用しながら一般の皆さんもアーカイブに参加していくことで、図書館の所有する震災関連資料が多くの人役に立ち、同時に震災の記憶の風化防止にも貢献することを願っています。

システムの課題はまだまだ山積みしています。コンテンツ不足の解消や、オンライン対応、使い勝手の改善をはじめ、復興ツーリズムとの連携を考慮した新たな震災学習プログラムの企画・設計等々、震災学習の成果を生み出す仕掛け・システムづくりを通して、資料がより活用されるという循環を促進させるための仕組みづくりは、緒に付いたばかりです。図書館は、震災に限らずさまざまな記録の収集、保存という大きな役割を担ってきました。今回のプロジェクトは、その知的財産の活用の方法や図書館そのものの価値を改めて見直すきっかけにもなるのではないかと思っています。

「改めて見直すきっかけにも」

震災以降各地の図書館で震災関連資料の収集が進められてきましたが、その活用を促すために大学と公的機関が連携し、継続的なプロジェクト

図書館の価値を改めて見直すきっかけにも

震災以降各地の図書館で震災関連資料の収集が進められてきましたが、その活用を促すために大学と公的機関が連携し、継続的なプロジェクト

後から新たな資料を追加することもできますし、任意でサイト上に公開することも可能です。マイリストはリスト作成者本人の学習に役立つほか、そのテーマに関心のある人にとっても貴重な情報源となります。

また「新規作成資料の紹介」として震災学習を通して新たに作成した資料を参照した資料とともに公開しているほか、テーマごとにおすすめの資料をまとめた「パスファインダー(手引き)」も掲載しています。

ちなみにReedyとは「葦のような」「細長い」「もろい」といった意味を持つ形容詞です。一本では細くもろい葦でも編むことで耐久性のある履物やかごになるように、震災関連資料もあるまとまりで束ねれば大きな意味を持つであろうことを例えて名付けました。また細くとも息の長い活動になるようにとの願いも込めました。

岩手県立大学×岩手県立図書館 協働研究

震災関連資料の利用活性を目指す
ポータルサイトオープン!!

2013年からの協働研究の成果の一部を公開するためのポータルサイトをオープンしました。本サイトをきっかけに、震災の記憶を、これからの学習や、新たな地域理解につなげていきましょう! スマホ・パソコンからアクセスできます(※随時、コンテンツ&機能追加中)。一部、スマホに対応していないコンテンツがあります

Iwate Reedy Project Portal
https://pike.si.soft.iwate-pu.ac.jp/~portal/
いわて reedy 検索

※Reedyは「葦のように細くもろい」という意味です。支えられ弱くなる葦のように、そして風吹くプロジェクトになるようにとの思いが込められています。

特徴① 図書館所属資料を検索したりメモできる

特徴② 人の学習成果や記録写真から資料を辿れる

特徴③ 学生と考えた新たな機能を定期的に追加

問い合わせ先: 富澤 (tomizawa@iwate-pu.ac.jp)

プロジェクトポータルサイトのチラシ

震災の記録を図書館に
震災関連資料をご寄贈ください

平成23年3月11日に発生した東日本大震災。発生から現在にいたるまで、被害状況・救済活動・復興などに関するさまざまな資料が生み出されています。岩手県立図書館では、震災の記憶を風化させること無く後世に引き継ぐため、震災関連資料の収集に取り組んでいます。

たとえばこのような資料を集めています

- 震災関連の記録集、写真集(視覚資料も含む)など
- 震災に関する調査報告書・復興に関する計画書など
- 震災関連のイベント・セミナー・相談会等のチラシや配布資料など
- 個人・団体が作成した手記・文集など
- 各種の活動記録(ボランティア関係資料、避難所だより)など
- 震災に関わる内容のフリーペーパー、ミニコミ誌、チラシなど

このような資料を発行されましたら、県立図書館にご寄贈ください。
※可能であれば、3部ご寄贈くださいますようお願いいたします。

寄贈の方法は、ご持参いただく下記宛てにお送りください。
※郵送いただく場合は、送料の負担をお願いいたします。

※なお、ご寄贈いただきました資料の取り扱いについては、県立図書館に一任いただきますよう、お願いいたします。

岩手県立図書館
〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通1-7-1 岩手県立図書館(震災資料担当 行)

送付先 TEL:019-606-1730 盛岡市盛岡駅西通1-7-1 岩手県立図書館(震災資料担当 行)
お問合せ TEL:019-606-1730 FAX:019-606-1731 E-mail: kyodo@library.pref.iwate.jp

「震災記録を図書館に」キャンペーンチラシ



震災学習ワークショップの様子(岩手県立図書館)

本プロジェクトは、図書館に保存された震災関連資料を活用しながら震災学習を行うことで資料の活用を促進し、さらにその成果を資料に紐づけて蓄積することでデータベースを充実させる「循環型アーカイブ」を目指しています。つまり震災学習

本プロジェクトは、図書館に保存された震災関連資料を活用しながら震災学習を行うことで資料の活用を促進し、さらにその成果を資料に紐づけて蓄積することでデータベースを充実させる「循環型アーカイブ」を目指しています。つまり震災学習

を重ねその成果をフィードバックしていけばいくほど、アーカイブが強化されていき、資料をより発見しやすくなっていくということ。そのためには震災学習の機会を増やすなど、例えば図書館の事業の一つとして定期的な学習の場を設けるなどの方策が必要ですが、昨今のコロナ禍で人を集めることが難しい状況なの悩ましいところ。震災から10年がたち、その記憶は確実に風化しつつあります。被災地では語り部活動などを通してその経験と教訓が語り継がれていますが、数十年後には語る人がいなくなるかもしれません。このような事態も想定しつつ、各地の語り部さんたちと連携し、その語りを動画でアーカイブし、震災学習につなげていく方法も現在検討している最中です。

本学の学生も、震災から時間が経つにしがいが自らが積極的に被災地を訪れる人が減っているように感じます。震災の記憶の風化は、少しずつ進んでいることを実感することも多くあります。現在の大学一年生の多くは、発災当時小学校2年生だったわけですから、無理もないことかと思えます。しかしこのプロジェクトをきっかけに震災や被災地